

要 旨

荒川弘『鋼の錬金術師』における喪失と回復

——マンガ表現が描く主人公兄弟の成長——

岡田 芽依

本研究はすでに日本社会に浸透しているマンガが読者にどのように読まれているかを確認した上で、読者が学問の視点から読むことが可能であるかを探求することを目的としている。その方法としてある一つの作品を取り上げ、具体的に読み解いていくことでマンガの可能性を探ろうとしているのである。本研究で取り上げるマンガ作品は、『鋼の錬金術師』（荒川弘）だ。『鋼の錬金術師』を取り上げた最も大きな要因は、作品に内在されている多層なテーマ性である。様々なテーマが読者に様々な問いかけを起し、作品が読者を巻き込む形でマンガ論を展開できることを期待した。

まず日本においてマンガがどのように扱われてきたか、その変化を主に漫画家の視点に立って確認を行う。その上で読者のマンガに対する認識の変化についても考察する。また、本研究の取り上げた『鋼の錬金術師』について、作品の概要についてはもちろん、作者である荒川弘についても基礎知識を確認し、作品に内在するテーマの多様性を発見する。

次に、『鋼の錬金術師』に潜在する数あるテーマの中から「家族」「身体」の二つのテーマをとりあげる。物語の始まりに深く関わるこのテーマを探ることによって「喪失と回復」という構図の発見を試みる。そしてそこから〈等価交換〉における疑問を見つけ問題提起とする。

そこで一度立ち直り、主人公兄弟の成長描写に注目し兄弟の描かれ方をエドワードの眼の描画や主人公兄弟らの一人称の変化から探る。また作品が兄弟の成長物語であるという点に着目し、セリフの分析を行っている。これによって作品が描く成長の影に存在する〈賢者の石〉を発見する。

〈賢者の石〉が発見できると、作品に登場する二人の「父」に注目する。それぞれ

の〈賢者の石〉の消費の仕方について比較しながら観察し、人間の尊厳について考察を試みる。ここまでは作品に描かれたテーマとして、人間の尊厳について考察を行うのだが、ここからは物語世界を飛び出し、読者一人ひとりの尊厳が危機にさらされていることについて言及する。また、これまで考察してきたマンガ論はマンガが持つ印象の拘束性に帰属することに触れた上で、マンガとその読者が見出だす可能性について述べる。我々は、マンガを読むことによって何を得ることができるのだろうか。

最後に、マンガ作品と我々読者の今後の関わり方について言及している。